

「よりひめ認定」制度について

大麻博物館館長 高安淳一（栃木県那須町）

<はじめに>

「よりひめ認定」を行うために

「よりひめ認定」とは、長らく流通の絶えていた大麻糸とはどのようなものか、一人でも多くの方に知っていただけることを目指しています。

そのため、素材の持つ力を存分に発揮できるよう、丁寧な糸づくりを行なえる人を認定しています。

その名は、奈良の大神（おおみわ）神社の伝説、活玉依姫（いくたまよりひめ）から。

これは、神と人を繋いだ麻糸の伝説です。

<背景>

大麻糸生産技術がまったくなくということ

この事実に気づいたのは大麻博物館開館（2001年）後なので、それほど前のことではありません。

日本の大麻と伝統技術で織られた経糸緯糸ともに大麻製の、昔ながらの「麻布」は、私が探し始めた時、すでに幻でした。

大麻農業が今でも残っている栃木県は、明治の早い時期に布を織るといった手間のかかる仕事は失われています。

そのため栃木の布織り技術、というより糸づくりですが、その記録もまったく残っていないことから県の伝統による大麻布（以下、たいまふと読む）再現は不可能になっています。

大麻の認識は、いまでも多くの方が「大麻取締法のせいで無くなった」と勘違いしているため、時代を第二次大戦後の70年ほど前と捉えがちです。

糸や布が出回らなくなった時も、その時代と思われがちですが、実際はその遥か前の明治以降から糸や布の生産は衰退を続けています。

第二次大戦後、すでに糸や布づくりは私たちが思っているより多く減少しています。

糸づくりの話は、会津地方近隣で80歳代の人に伺っても「おれの婆さんがやってたくらいだあ」と話し、近年まで大麻織りが残っていた地域さえ、明治生まれの人でほぼ継承が途絶えています。

昔「麻づくりを行っていた」という90歳代の人に聞き取りを複数行なっていますが、大麻農業は覚えていても、糸づくり、布織りに関しては、やっていなかったと記憶が共通しています。

そのような状況から一般的に思われているより前の時代、おそらく大正時代すでに大麻布の一般流通はほとんど絶えていたものと考えられます。

大麻布の認知はまだ日が浅いこと

私が会津地方のお師匠さんにお会いして、大麻の布を実際に使い出すまでは、現代に大麻と認識し素肌につけ、日常に使う行為を確認することができませんでした。

そのため昔から伝えられた「麻布」の特徴は書籍やインターネット上で語られていますが、苧麻の特徴と混じっている話が少なくありません。

実体験に基づいたものではないため、極めてあやふやで、個人の感想に基づくリアリティのある体験談は今でも皆無です。

もちろん昭和30年代までは、村内で生産され日常着として使っていた人はいましたが、いずれも80歳以上の方です。それより下の世代になると「母ちゃんの作った服なんて、恥ずかしくて着れなかった」と、貧しさや田舎臭さといったネガティブなイメージに変わっています。

会津地方ではごくわずかですが、それ以降も大麻布は織っていました。その用途は蒸しものに使う布「すきんの」として、村内に出回る程度です。

また反物で買って服を仕立てたという話もありますが、もったいなくて飾っているだけという話も聞いています。貴重な大麻布を手に入れても、使われていなかったということが実態としてありました。

世間一般の認識

誰も大麻の布を使っていない、「麻」として手に入れるものが国内産の苧麻であれば大したもの、手績みのものでも中国産の苧麻であれば上等と、そんな状況は今でも変わっていません。

一般的にプロとみなされ「麻」の扱いを生徒さんに教える染織作家も「大麻布」は知りません。

私も直接お会いした、一流の着物の仕立屋さんでも大麻布は扱ったことがないと率直に語っています。そのため、紡績糸のイメージから「麻糸は弱い」と認識されていました。

「麻」のなかでも大麻に興味をもち、ヘンプ製品を扱っている人は、まだ区別していることからありがたいものです。しかし、残念なことにヘンプ100%の製品は存在しない事実は知られていません。

法律上の問題ですが、大麻・ヘンプは指定外繊維で、法律の対象外であることから他の材料との混紡率を表示する義務がありません。ヘンプ製品は使用量の多いもので、おおよそ綿40%・ヘンプ60%です。綿以外に、シルクやレーヨンの混紡も見受けられます。ヘンプの比率は60%を超えると衣類として使えなくなると紡績業を行っていた人は証言しています。

そのためヘンプは他の素材の性質と混じっていることから日本の大麻とは、やはり大きな違いが出ています。

「麻」という用語の混乱と大麻布があまりに出回っていないことから、プロの骨董屋さんでも大麻布の見分けができる人は、おそらく全国に10人いないだろうと考えられます。

大麻博物館では、骨董市の「麻」専門業者に大麻布の見分けをレクチャーしたことがあります。

見当はついていたようなのですが、やはり決め手になる糸の績み目を認識していませんでした。

「麻布」のプロ中のプロと世間一般に認識されている方でもそのような状況にあります。

苧麻や他の麻類のイメージから「硬い」と思い込んでいる方も少なからずいることなどは、みなさまご承知の通りかと思えます。

<「よりひめ®」のクオリティ>

「よりひめ認定」の糸の意味

「よりひめ認定」の糸は、今ある「麻」の混乱と認識不足を解消するひとつの解決策としてあります。大麻布を提供したいところですが、そこまでの生産量は今のところ難しいため、まず糸の普及を目指しました。その目的は、大麻本来の性能を知っていただくこと。プロの世界で「麻」は涼しく硬く、糸が弱いと認識されています。その認識を覆す必要性から、全てが始まっています。

通常、布を織る際は、糸にフノリをかけ織り上げます。フノリをかければ多少欠点のある糸でも接着されることで織りに支障なく使えます。織り上がってから使い込むことで、フノリが落ち、繊維が柔らかくなり大麻本来の性能が発揮されます。

しかし、糸の状態の販売することを考えた場合、硬い糸では大麻本来の柔らかさが理解されません。特に苧麻糸との違いを見せる必要があると考えました。そのためフノリをかけずに糸の販売を行う必要が出てきてしまいました。

大麻本来の柔らかさを知ってもらうため、縎（よ）りをかけただけで世に出す。そのため、糸の方向性を知らない人が扱っても大丈夫な糸づくりが求められるようになりました。

そしてもう一つ、手作りの糸は「弱い」という誤解を払拭する必要があります。

糸を扱うプロの世界でも、紡績糸は双糸であるため単糸の績み糸は「弱い」と確信し、それでは使えないと言いつちられています。そういった誤解を払拭するため、無茶な扱いに耐え、しっかりした糸績みができる人に「よりひめ認定」を出す必要があります。

<「よりひめ認定」について>

「よりひめ認定」の目安

麻糸績み技能者「よりひめ」という名を称号と捉え、そこを目指す人は努力のピークを「よりひめ認定」にしてしまうため、認定が下りないと糸が乱れがちです。

また、淡々と力を抜いて糸を績み、績み目が乱れない糸づくりを行えなければ認定後が続かなくなります。とはいえ認定制度である限り、ある一定水準に達していれば本人の意思のあり方に関わらず認定は出しています。

「よりひめ認定」の意義と本質、そして願い

責任を持って、大麻の誤解を払拭する糸を販売するため、「よりひめ認定」の糸については、高い糸績み技術を要求することになってしまいましたが、本来の布織りはここまで手間をかける必要はありません。昔のように分業化していた時代であっても、大麻糸の性質を知っていれば、多少問題があっても織り手が補えます。

「よりひめ認定」の糸は、ハイクオリティな糸づくりを強めています。
麻糸績み技能者「よりひめ」は、あらかじめ様々な用途に耐えられる糸づくりに努力する心の強さ、正直さが必要なのではないのでしょうか。

麻糸績み技能者「よりひめ」を目指すことで得られる学びは、決して少なくありません。
そして次の時代に、しっかりとした手わざとして糸績み技術を伝えられる存在であることも間違いないところだと思います。

「よりひめ認定」は通過点として、その先に意味を持たせるのは、その人自身です。
そこで立ち止まらず、そこから先を淡々と目指していただけるよう私は願ってやみません。

2017年2月6日

「一般社団法人日本古来の大麻を継承する会」
公式HP(yorihime.com)へ公開内容